

## 関口 雅文

① クロッキーが作品に活かされた、と感じた瞬間はありますか？

クロッキーと油絵はかなり近い感覚なので「常に活かされている」とも言えますし、「そもそも区別していない」とも言えます。

② どんなクロッキーをやってみたいですか？（素材、サイズ、時間、モデルの設定など）

複数人のヌードクロッキー。単体では生み出されない、組み合わせによる美しい形を追いかけてみたいです。

③ クロッキーに欠かせない要素とは何だと思えますか？

身体性を伴う即興性と臨場感。

④ クロッキーの醍醐味は何だと思えますか？

アクシデントも含め、その時にしか描けない新鮮なイメージ。ある意味で比較的短時間で勝負のつく『相撲』に似ているかもしれません。たとえ同じ取り組みであっても、二度と同じ勝負にはならない、というところも近い気がします。

⑤ どういう時にクロッキーをやりたいくなりますか？

魅力的な要素を見つけた時。

⑥ 公開クロッキーを通して発見した、または再認識した事柄はありますか？

サイズが100号という大きさにになると、木炭紙サイズ以下とは全く別物になってしまうことです。モデルさんとの距離も近いので、それまで培ってきた感覚とのズレがとても大きく感じます。

⑦ 普段の制作の中においてこだわりを持っているポイントはありますか？

その時、その瞬間にしか起こらない閃きや直感を信じて、それをどのように作品として成立させるか？伏線を回収するように画面を組み立てていくことです。

⑧ クロッキーをする上で、こだわっているものはありますか？

基本的には普段の制作と同じです。それを限りなく短い時間の中で行っていくような感覚です。

⑨ 逆に意外とこだわりがないものはありますか？

正確さには全くこだわりがありません。